

せんだい寸景

NO9 2005年2月

発行：じっかい電脳事務局

ジャズ流れるころ 定禅寺通りの秋

定禅寺通りは西公園から市役所前までの大通りだ。あのころ、昭和30年代のことが植えらればかりのけやきはやせけ緑陰などどこにもなかった。それがいま樹々は6階のビルを超すまでに成長、鬱蒼たる緑の帯となり樹下には散策路が整備、数々の彫刻、噴水が配され仙台一美しい通りとなった。沿道のビルもいくつかこの通りにふさわしいデザインのものがたちなかでも01

年1月開館した「せんだいメディアテーク」(図書館ほかの公共空間)は「世界注視」とはちと大仰だがとにかくユニークな建築で世界唯一の構造体(せつめいしろって? そりゃむりだインターネットでご覧よ)なかの居心地もよしい。この通りが仙台を代表するそのゆえんは並木ばかりではない。七夕パレードはじめいくつものイベントが

ここを舞台に開かれる。なかでも師走の「光のページェント」は20年続くいまもなお感動を呼ぶ。他都市の「光もの」あまたあろうなか出色なのは「広告なし・点滅なし」ごく小さい電球をただ点けるだけ—この一点につきる。62万個の明かりは実にうつくしい。

もうひとつ自慢していいのがジャズフェスティバルだろう。9月上旬の2日間、仙台の街中はジャズ一色となる。14回目の昨秋は参加660団体。仙台駅から広瀬川両岸までいたるところステージと化シアマ・プロまじっての演奏を人々は思い思いに楽しむ。この二つのビックイベントがいずれも市民の手づくり(ボランティア)というのが素晴らしい。仙台も悪くない



ぞ、思いを新たにするのはこんなときだ。

さて、いつものようにウイスキーとグラスをポケットに街に繰り出すとするか。西公園からメディアテークへ。ここの建物四面すべてがガラスで1階は通り側が開放されフロア全部が外部と一体となる。おや、矢内克之じやないか。おしゃれだね、素敵なお紳士ぶりだなあ。おくさんもご一緒か。そう、このフェスは戦後ジャズ全盛期世代といった年配の男女の姿がじつに多いのだ。

車を締めだした通りをそちこちと「聴き拾い」ながら市役所前広場にでると周辺はメイン会場だけに人で埋まっている。野外バーで水割りをひっかけてるおじさんに目をやりながら、さらに東に進むと錦町公園に出る。かつてレジャーセンターと呼ばれた仙台市の体育館があったが移転撤去され公園になった。ここの芝の広場がお気に入り、で、腰をおろし、ポケットから「あれ」をとりだしグビリ。残暑とはいえ頬にあたる風がきもちいい。ふと見やったさきに「??」ツカダ、か。ヒガシ



ノもいる。ギロー、ナガノ、来てたのかおまえたち。ツカダにからかわれたかヒガシノがあかくなった、ギローがいつもの悪い癖ではやしたてるふう。オガタ・ゴオが柔らかい眼差しを向け、ナガノはアッ、ウイスキーをあおるように一気飲



みだ。かわんねえなあ。ほかにもっとだれかきてないのか、ミヤウチはどこだ、セミネ、ヤスクニ顔見せる。と、手元のグラスが空だ、ポケットからビンを出し、注ぐ。あいつらーと見やったさきにはもうだれもいない。ゴスペルグループが歌う、聖者の行進がながれてくる。

フォークシンガー高田渡歌う「東一番丁・ブラザー軒」がすきでね。あの哀感がね。七夕の宵ブラザー軒の席にいと死んだ父と妹が姿を現す—というスジだ。そんなふうなジャズフェスの宵を期待して次もまた錦町公園にでかけてみようか。